

## 序文

多様な環境影響を、客観性を損なうことなく集約的に表示し、それによって環境影響に関する正しい眺望（パースペクティブ）を獲得することは、環境マネジメントに携わる人々の、長年の果たせぬ夢であった。その理由は、一般的には、環境影響が大気汚染、水質汚染、土壌汚染、エネルギー消費などの、本来的に実に多様で異種類の構成要素からなる複合体（コンプレックス）であることによる。そして、このような認識は、自然科学的見地からは当然のことでもあろう。しかし、社会科学的見地からは、また若干違った、これまた本質的理由を付加することも可能である。

それは、環境影響が（意図して得られた好ましい結果としての利益に比較して）企業にとっての意図せざる、好ましからざる結果であることである。いわば、「内部経済としての企業利益（付加価値）」と「外部不経済としての環境負荷」の相違である。前者の利益獲得に関しては、自然科学的な「原因結果の因果関係」だけでなく、社会科学的な「努力と成果の目的手段関係」が成立するのに対して、後者の環境負荷に関しては、社会科学的目的手段関係が機能しているわけではなく、ここに環境マネジメントに本来的に目的手段関係を前提としたマネジメント・コントロールを介在させることの原始的困難性が存在するのである。

しかしながら、環境マネジメントが本質的には、財・サービスの生産という「目的手段関係」を前提とした（あるいは、「目的手段関係」に擬制する）「環境要素のコントロール」であるとすれば、さすれば無理にでも、そこには経済的利益に匹敵するような、なんらかの意味ある「統一的概念」が必要とされよう。それが、「付加価値」に披見されるような「環境負荷」の概念である。すなわち、「雑多な構成要素の寄せ集め」ではなくて、「単一の測定単位で表示可能なダメージの規模」である。前者ではベクトルがいろいろな方向を無秩序に志向しているのに対して、後者ではベクトルがみな同じ方向を向いており、エコ・エフィシェンシー志向のマネジメントに比較的容易に応用可能なものである。

このような夢をかなえるツールとして開発されたのが、環境影響評価係数としての J E P I X (Japan Environmental Policy Priorities Index) である。J E P I X は、この分野の先達であるミュラー・ヴェンクやブラウンシュヴァイクが語るように、エコバランス作成、LCA 実施に必要な不可欠な自然科学的客観性、プロセスの透明性、構築的秩序性、数的表示可能性、簡易操作性などの基本的要素を過不足なく備えている。そして、魚住隆太先生の御努力の成果である、エクセルシートによる簡易演算メソッドの普及と、J E P I X フォーラムの事務局を長年担当されてきた山武株式会社の後藤達也、水谷佳奈両氏の御尽力により、今日まですでに、わが国の延べ 50 社以上の環境先進企業の環境マネジメントに、実際に役立てられるようになった。

その成果は、主として企業の内部的環境マネジメントにおけるものであるが、環境報告（環境報告書、CSR レポートなど）における J E P I X の利用も、また忘れてはいけないものである。内部マネジメントにおける有用性ととともに、外部報告における比較可能性の確保は、環境パフォ

パフォーマンス評価が環境会計としての適性を獲得するために必要なものだからである。このような意味で、JEP I Xは内部ステイクホルダーにも外部ステイクホルダーにも有用なコントロールツールとなっていると考えられる。

今後、アカデミックなL C A研究者の英知を結集するとともに、プラクティカルな環境マネジメント実務家の経験を集積することにより、いっそうJEP I Xを企業マネジメントとステイクホルダーにとって使用しやすいツールとする努力がなされることを、ここに期待するものである。

2007年5月1日

JEP I Xフォーラム会長

国際基督教大学（I C U）教授 商学博士 宮崎修行